第 276 号
平成11年（1999年）11月29日

関西大学通信
THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

関西大学広報委員会
〒564-8680
大阪府吹田市山手町３-３-35
FAX 06-6337-7078
http://www.kansai-u.ac.jp/

晩秋の姫路城（写真提供；姫路市）

文化財保存と地震

八尾　眞太郎

昭和二十五年に制定された「建築基準法」が、今年初めて抜本的に改正された。

この改正は、規制緩和、行政改革、国際調和等々日本社会の体質改善の流れに沿ったものであるが、阪神・淡路大震災が改正の動きに拍車をかけたことも事実である。改正内容の要点は、まず建設業界の高コスト構造を是正することである。次に建築物の災害安全性を法的に最低限保証はするが、建築主の責任においてさらに安全な選択肢が与えられたこと等である。

先の阪神・淡路大震災においては、多くの文化財が被災したことも問題となった。一般の既存不適格建築物は耐震診断基準によって補強する手段が概ね確立されているが、文化財の保存となるとかなり異なった側面を持っている。

世界文化遺産に指定された国宝姫路城は、昭和の大修理を終えて既に久しい。当時文化財を補修する際に、その耐震性を判定した規範は何であったか。それは数百年以上の時間に耐えてきたと言う実績であった。我が国であればその間に大きな地震に一度ならず耐えているはずである。いかにも文化財に相応しい知恵であると言えよう。

しかし、先の阪神・淡路大震災の翌年には、文化庁より各都道府県教育長宛に「文化財建造物等の地震時における安全性確保に関する指針」が通知されている。内容の主旨は「可能な限り被害を小さくするように個々の文化財について工夫すべし」であった。ユネスコの文化財保存に関する基本理念は AUTHENTICITY をキーワードとして「材料」「形」「技術」「環境」の保存に努めることであるが、具体的な補強手段となると最新の工学を如何に応用するかと言う点で担当者の間で発想にかなりの幅が見られるようになっている。

姫路城昭和の大修理においては天守閣を支える石垣の本格的な改修工事は見送られた。木造の大構造物である天守閣と石垣との間に取り交わされる微妙なバランスの妙には未だに謎が多い。私はその謎解きに少し挑戦しようと思っている。

文化庁とユネスコの姿勢からも解るように、文化財は単に「古い物」ではないだけに取り扱いがむつかしい。文化財を保存することの意義は、世界各国の国民が国旗と国歌を愛することのそれと同様であると私は考えている。

文化財は、かっての輝かしい栄光の跡を留めるばかりではない。幾多の戦場となり、血生臭い歴史を繰り返した舞台となったことに対して、各々の苦難を乗り越えて現在に至っている歴史の重厚さと畏敬の念を人々が共有することができる。その共有によって人々はその社会に帰属することの自覚と自信を持つことができる。

文化財を粗略に扱えば、人心が荒み社会が荒廃の道を辿ることとなる。

文化財保存問題がこれらの問題の全てであるというのではない。戦後五十年余り日本国民が辿ってきたイデオロギーと心の変遷を今、国民一人ひとりが順を追って省みることがどうしても必要であると私は考えている。今、日本社会が陥っている社会心理的構造の問題点を根底から解明しておかないと、日本社会の体質改善に関する動きにも明るい見通しを持つことができない。私達は今、未来に向かってどのような遺産を残しつつあるのだろうか。

目的と自信を失った若者達に対していると、そのように憂慮される。

（工学部教授）

HEADLINE

2面　六甲山荘オープン
4・5面　特集「頻発する大地震」
6面　インターンシップ体験記
7面　法学部と漢陽大国際シンポ
8面　学園祭・大島賞贈呈式

千里眼

先日、時間を見つけて箱根へ足を延ばした。ホテルの前に拡がる芦の湖とそれを取り囲む山々は、国立公園に指定されており、人の手は全く（といってよいほど）加わっていない▼長い長い夏を終え急にやってきた冷え込みに、着いた日にはまだあおかった木々の葉が一日ごとに色付いていく様子に、自然の偉大さを眼のあたりにした。晩冬から半年間の闘病・療養生活で実感した人間の持つ自然治癒力を考え合わせる時、自然にいだかれて生きることの重要性を再認識せざるをえなかった▼箱根の彫刻の森を訪れた。山々に囲まれて点在する彫刻の中に、「シンフォニー彫刻」というステインドグラスで作られた塔があった。外から見る限りでは、灰色の建物にすぎないが、中に入り階段を昇るにつれ、太陽の光とその除り、そこにいる人間達の楽しい語らいや感動の声、無心に階段を昇る足音、早くなる息遣いが一つのシンフォニーとなり、高みへと誘われる▼塔の入り口には、「すべてのことは見るよりも探し出すこと。／生きる喜びを…」という詩人の言葉があった。**（石原敏子）**